

2020年度 国外研修レポート

比較文化学部比較文化学科

渡邊顕彦

1. はじめに

2020年度、オーストリア共和国の首都ウィーンのオーストリア科学アカデミー(Österreichische Akademie der Wissenschaften、以下 OeAW)のハプスブルク・バルカン学研究所(Institut für die Erforschung der Habsburgischen Monarchie und des Balkanraumes、以下 IHB)に所属しつつ、ドイツ・ミュンヘンのバイエルン州立図書館(Bayerische Staatsbibliothek、以下 SB)、コブレンツ市の州文書館(Koblenz Landeshauptarchiv、以下 LHA)、OeAW 文化学・演劇史研究所(Institut für Kulturwissenschaften und Theatergeschichte、以下 IKT)等でも調査を行った。以下この研修について報告する。

事前準備段階で研修者は一時期ウィーン大学(Universität Wien、以下 UW)古典文献学および中世・新ラテン語学部(Institut für klassische Philologie, Mittel- und Neulatein、以下 KPHIL)に所属することも検討していたが、オーストリアや日本の関係部署と打ち合わせしていく中で、近年は OeAW が純粋な研究機関として外国人研究者の受け入れを多く行っていること、またその1部署である IKT も後述するように貴重な調査対象史料を保管していることが判明したため、前年度日本とオーストリアの二国間共同研究(セミナー)に共同参加していた IHB 所属研究者の紹介で同研究所に一時的に籍を置くこととなった。研究指導者はザルツブルク大学史学教授と IHB 副所長(当時・現在 IHB 所長)職を兼務し、ハプスブルク帝国史を専門とする Arno Strohmeier 先生にお願いした。IHB からは研究用の場所と必要設備(パソコン等)を提供され、様々な専門を持つ所属研究員たちと交流することを得、同時にウィーン市内にある KPHIL、IKT、オーストリア国立図書館(Österreichische Nationalbibliothek、通称 ONB)、ドンファン文書館(Don Juan Archiv)などにも必要に応じて赴くことができ、大変便利であった。

新型コロナウイルス対策のため、研修先滞在期間は当初予定していた1年を大幅に下回り、8月5日から翌2月18日までの約7か月半となった。しかし日本では入手しづらい多数の関係二次文献をオーストリアとドイツで閲覧し、コロナ禍の最中ではあったものの研修者の主要研究対象であるドイツ語圏の近世ラテン語文献研究をけん引する複数の現地研究者たちと交流し、またミュンヘンとコブレンツにおいて17世紀手稿を直接手に取って調査することにより、研修者の中で最重要課題と位置付けていた部分はおおむね達成できたと考える。

2. 日本関係の近世ラテン語文献、特にイエズス会劇について

近世(15~18世紀)のヨーロッパにおいて、時代・地域によって異なるもののおおむね各国語(イタリア語、英語等、独語)と比肩しうる、時には遥かに凌駕する量と質のラテン語文献が手稿や印刷物として流通し、演劇や演説など口頭でも使用されていたことは従来知られてきた。ただこれらのテキストはおおむね(中世ラテン語と対比される)擬古典ラテン語で作成されているため、正確な理解および享受にあたっては広範な古典古代のラテン語に加えて近世ヨーロッパの文化・歴史等背景にも目配りする必要がある、そのため西洋古典学、ヨーロッパ近世史、各国文学など様々な近接学術分野の狭間に落ちて学界ではエラスムス等、少数の著名な人文主義者によるものを除き長いこと等閑視されてきた。しかし第二次世界大戦後、ヨーロッパ統合の深化と並行して同地域共通の遺産としての近世ラテン語学への関心も高まり、特に1971年に国際新ラテン語学会(International Association for Neo-Latin Studies、以下 IANLS)が設立されてからは米国を含む世界中の研究者が参加する一大分野に成長しつつある。例えば2014年から2017年にかけて欧米の主要な研究出版社から連続して3点の総合的かつ大部の研究図鑑(Ford 2014、Knight 2015、Moul 2017)が出されていることから研究界の関心の高まりと研究者層の増加がうかがえる。

ただヨーロッパを中心とする近世ラテン語研究は扱われる文献が主に同地に関係するものに限定される傾向にある。近世はヨーロッパが全世界に進出しグローバルな勢力となっていった時期でもあるので、近世ラテン語文献もヨーロッパ外の地域文明を扱いたまたヨーロッパ外で作成・出版されているものも多いが、これらの読解研究のためには上記の多岐にわたる背景知識に加えて当該ヨーロッパ外地域も理解する必要があるため、この類の史料は比較的未開拓な近世ラテン語学の中でも特に調査研究が進んでいない部分である。

ただこれらヨーロッパ外を扱う近世ラテン語文献の中で日本と関係するものは宗教学および史学(特にイエズス会関係やキリシタン関係、日本近世史のもの)で比較的広範な関心を集めており、上記傾向の中では若干例外的に日本で研究や翻訳されたものがある。またヨーロッパで作成された日本関係の近世ラテン語文献としては叙事詩や多数の演劇の存在が知られ、特にドイツ語圏で上演された後記のものは大部の共編著(Hsia 2005)や近年日本語で発表された研究成果(大場 2016 等)がある。ただ研修者自身も2016-2018年度にオーストリアとの二国間共同研究 Japan on the Jesuit Stage(日本側代表者渡邊顕彦、オーストリア側代表者 Florian Schaffenrath)を行って実感したが、ドイツ語圏内の残存史料の調査研究の中で特に劇のラテン語手稿は手つかずのものが多く、さらに東欧やドイツ語圏外の西欧では上演録すら今になって初めて収集整理が開始されたり、欧州内でそのレベルにすら達していない地域・国も多々ある。よってこの分野は多くの学界未見残存史料がヨーロッパ中に散在している、これからの開拓が一層期待されるものといえる。

研修者は研修期間中に上記二国間研究の成果をまとめた共編著(学術出版社 Brill より今年度刊行予定)の編集作業を続行しつつ、同研究プロジェクトで取り扱い始めたミュンヘンで1665年に上演された日本劇、および二国間研究終了後に調査を開始したコブレンツで

1625年に上演された同種劇の残存脚本(両者とも手稿)を本研修の主要テーマとした。以下、調査の過程と研修期間中の研究進捗について簡単に述べる。

3. 研修期間中の調査

2020年度中4月から8月初めにかけては新型コロナウイルス対策のためオーストリアに入国できず、国内研修とした。この期間中は国立国会図書館や自宅にある史料、および以前国内外の共同研究者より入手した上記ミュンヘン劇とコブレンツ劇の電子画像を基に研究を進めた。特にコブレンツ劇の手稿の読み取りとその内容理解において大きな進捗があり、同劇が1613年、作成上演のわずか10数年前に長崎に近い有馬で起きた殉教を扱っていること、その墓や遺物が特定されている複数の日本人迫害者およびキリシタンが登場していること、またそのあらすじはおそらく1623年にフランダース出身のイエズス会師 Trigault がラテン語で出版した日本宣教史からとられていること、をつきとめた。

初夏に入るとオーストリア入国許可(査証)を新たに得られる見通しがたったため渡航準備をし、8月5日に無事渡航出来た。8月15日から正式にIHB所属研究員となり、所属先やKPHIL、ドンファン文書館の研究者達と打ち合わせを始め、またONBやUW所蔵の関係二次文献の調査を開始した。これらの打ち合わせや調査により、これまで培ってきた上記2劇の理解がおおむね妥当であること、しかし同時にミュンヘンとコブレンツを訪問し、手稿の現物を調査すると同時に上演の時代的背景についてより理解を深める余地が十分あるという感触を得た。同時にIKTともコンタクトを開始し、同研究所が保管している、演劇史を専門とされていた故Dietrich教授が主に収集した日本関係イエズス会史料の調査も開始した。

9月には現地の生活や研究環境にも慣れてきたので、15日から25日までインスブルック、ミュンヘン、コブレンツ、ゲッティンゲンを巡る科研(課題番号19K00503)調査旅行を行った。インスブルックとゲッティンゲンではドイツ語圏の近世ラテン語文学やイエズス会劇研究の第一人者たちやほかドイツ語圏近世史の専門家たちと面談し、数々の貴重な示唆をいただいた。またミュンヘンとコブレンツでは第一目的としていた劇手稿の現物を詳細に調査するほか、劇が作成上演された学院の同時代の年代記やほか多数の関係する未刊行手稿を実見することが出来、大きな進捗があった。特にコブレンツ劇脚本手稿は2つのグループに分かれていること、うち1つは短く整理された最終稿に近いもので、2つ目は長めだが未完の草稿集であること、また後者の近現代アーキビストによる通し番号と実際の内容の順番に齟齬があることが現物を慎重に検討した結果確認できた。これら成果は準備中の単著書にとって必要不可欠であり、かつ現地で現物を手に取って調査しなければ得られなかったものである。

10月以降はこれまで得た成果を整理し単著書にまとめる作業に専念した。11月よりオーストリアは新型コロナウイルス対策のため厳格なロックダウン体制に入ったが、それを見越して10月中にONB等図書館や文書館の二次史料は可能な限り調査を完了し、UW付

属図書館の蔵書も必要なものは借り出して宿泊先で参照できるようにした。またロックダウン前に IKT も複数回訪問し、Dietrich 収集史料調査の傍ら同氏からかつて教えを受けたり協力していた研究者達にも聞き取りを行い、史料成立についての理解を深めた。なお同史料は Dietrich 氏および複数の共同研究者による未刊行の近世一次史料調査結果や解説・論文草稿を含み、今後適切に記録・公開されれば学界に多大な益があることは明らかであるので複数の国内外研究者たちと連絡をとりつつ共同研究を行う可能性を探っている。

11 月から 2 月まではロックダウン体制が続いたので自宅で上記史料の整理と国内外の研究者たちとの電話等による打ち合わせを続行した。帰国直前にロックダウンが緩和されたので IKT、ONB、ドンファン文書館にて最後の調査と打ち合わせを行い、IHB においても離任手続きをした。2 月中旬の帰国後は自宅で 2 週間自己隔離し、調査結果の整理を続行した。

4. 研修期間中の口頭発表、論文(等)執筆、著書原稿準備

4 月中は国内待機だったが、UW で以前から予定していた共同授業の講義を 1 回「Japan in Neo-Latin Poetry and Literature」と題してオンラインで行い、現地の学生や他教員たちをまじえた質疑応答も行った。また 6 月にはイタリアの学術誌 *Itineraria* に掲載される論文 1 点(Watanabe 2020)の最終校正をした。

9 月から 11 月にかけては英国の出版社 Bloomsbury と本研修成果、主にミュンヘン劇とコブレンツ劇を中心とする成果をまとめた単著書について打ち合わせを重ね、12 月に出版契約を締結した。新型コロナウイルス対策による渡航延期・短縮とロックダウンの影響で原稿提出は当初考えていた 2021 年 3 月末より遅れ 9 月末に設定されたので、研修期間終了後も主に調査結果の整理という形で原稿執筆は継続される。

11 月にはことわざ関係の和書の書評原稿(英語)をカナダの学術誌 *Proverbium* に送付した。また国内待機時期より準備を始めていた 16 世紀から現代にいたる羅和辞典の歴史についての日本語論文原稿も書き上げ、重慶大学所属の編集者に送付した。この論文は中国語訳で出版される予定である。

ほか上記二国間共同研究の成果をまとめた Brill 共編著書の準備に継続して関わった。同所は 2021 年度中に出版予定。

5. おわりに：コロナ禍中のオーストリアとドイツ

今年度は新型コロナウイルスの流行があって世界中で渡航が規制され、上に記した事柄以外に研修者も 6 月に参加発表を予定していたポルトガルの国際学会が次年度に延期になり、2021 年夏に予定され参加準備をしていた(発表要旨は受理された)IANLS 総会も 2022 年度に延期されるなど、多大な影響を感じた。

ただその中でもインターネットを利用したコミュニケーションの広がり世界的に目を見はるものがあり、学術や教育にも多くの益をもたらしていることは実感できた。上記の

通り4月、国内待機中にUWにて遠隔講義と質疑応答を行ったほか、研修者も2020年度は欧米や日本で行われた第一線の研究者たちによるオンライン講演を平均して月2回ほど視聴した。また現地滞在期間中複数回、オーストリア学術交流会(Österreichische Austauschdienst-Gesellschaft、通称OeAD)主催のオンライン交流会に参加し、日本及びフィリピンにおけるクリスマスについてパワーポイント発表も行った。

しかしながら同時にこのようなオンライン交流はやはり対面のものとは親近感の醸成や意思疎通の速さに差があることは否めないとも感じたしコロナ禍が比較的収束していた夏季にウィーンおよびインスブルック、ドイツ各地で多数の研究者達と対面で打ち合わせやその他交流を行ったことはネットワーク作りの上でオンライン交流を相当凌駕する効果があったと信じる。ただ9月後半の科研調査旅行中からすでにオーストリアよりもドイツのほうが飲食店やホテル、公共交通の規制が確実に厳しく履行されていることも印象的であった。なお後にウィーンのロックダウンが厳格化した際も、IHBで行われたオンライン会議では主に欧州の参加者達が図書館や文書館の利用制限により自らが被る多大な不利益を激白していた。現在(2021年4月初旬)もオーストリアの大学の授業は大部分がオンラインであり、飲食店はテイクアウトのみ、ホテルは閉鎖された状態が続いている。また研修者が滞在中、特に1月から2月にかけてはほぼ毎週末、コロナ規制に反対する集団の大規模デモがウィーン中心部で勃発していた。このような混乱や生活の不便、感染拡大の危険が一刻も早く収束するよう祈るばかりである。

ただ上に記したようにコロナ禍中にオーストリアに滞在できたことにより、研修者自身多くの研究成果をあげられたと考え、今後は研究発表や教育によりそれを大妻女子大学内外に還元していく決意である。当初予定していた形とは相当異なる在外研究・研修となったが、数々の変更と不確実性にもかかわらず理解を示し渡航・滞在を可能にし支えてくださった大妻女子大学内関係部署の方々に深い感謝の念をささげる。

参考文献

- Ford, P., J. Bloemendal and C. Fantazzi (eds.) (2014), *Brill's Encyclopaedia of the Neo-Latin World I-II*, Leiden.
- Hsia, A. and R. Wimmer (eds.) (2005), *Mission und Theater: Japan und China auf den Bühnen der Gesellschaft Iesu*, Regensburg.
- Knight, S. and S. Tilg (eds.) (2015), *The Oxford Handbook of Neo-Latin*, Oxford.
- Moul, V. (ed.) (2017), *A Guide to Neo-Latin Literature*, Cambridge.
- Watanabe, A. (2020) 'Catholicism, Early Modern Japan, and the Greco-Roman Classics', *Itineraria* 19: 197-213.
- 大場はるか(2016)「近世内オーストリアの居城都市グラーツにおけるイエズス会劇と肥後・八代の殉教者: 「日本劇」の比較考察のために」『比較都市史研究』35:43-58